



巻頭言

変革の時代と生産技術振興協会

世古口 言 彦*

『科学は尽きることのない資源である。基礎研究をはじめ工学、産業技術でリーダーシップを確保することが、国益(安全保障、繁栄、国民の健康等)に資する』これは米国のクリントン政権が当初から掲げた基本政策であった。振り返ってみると、先進国の科学技術政策のベクトルは1990年代を通してこれとほぼ同じ方向に向けられるようになり、ついで途上国も追随する形になった。

2000年時点の世界各国の科学・技術開発に関する調査結果が米国商務省から報告されているが、この中でも科学・技術政策においては先進国と途上国とで顕著な差異はみられない。報告書全体を通して、共通した重点項目を抽出することができる。いくつかの例をあげると次のようである。

◎イノベーション：これに関連した事項

- ① 基礎研究と人材開発による知的な創造
- ② 技術クラスタ間の共同研究の推進
- ③ 新しい技術と人的ネットワークを国際的に活用
- ④ 起業家精神の高揚

◎高いレベルの研究開発投資

◎革新的な中小企業群の育成

◎高度な技術教育を受けた労働者の育成

◎国内の研究協力と国際的研究協力の推進

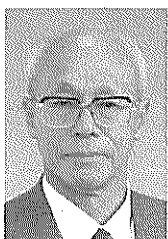
目指すところは先進国も途上国も差異がなくなってきたのであるが、研究開発予算については著しく違いがあり、科学・技術における開発力の相違はその面から自ずと存在しているのが現実である。ちなみに、わが国の研究開発費のGDPに占める割合は2.913%であり、比率においても、絶対額においても世界の第2位である。世界の生産工場となりつつある中国は今のところ、0.693%である。この

大きな違いは何を示唆しているか。わが国が科学と技術の世界で真に創造的な活動を展開し、その実を挙げることが可能な恵まれた環境にある、ということである。今のところ、中国のGDPは日本の4分の1弱であるが、日本と同じGDPになるのに20年かからないだろうと専門家はみている。こうしたトレンドを考えると、これからの10年がわが国の将来にとって極めて大きな意味を持つ時期であることがわかる。今与えられている機会を活かすために、英知を結集することが強く望まれる所以である。

さて、最近“経済再生”という言葉をよく耳にする。これは50有余年をさかのぼる戦後に盛んにいわれた“産業復興”を髣髴とさせる。当協会は戦争で壊滅状態となった産業を復興させるために、今日という“産学間の技術移転”を推進するために設立されたという経緯がある。短期的にみた経済の再生に役立つだけではなく、世紀を超えて求められる科学技術と産業技術の連携の絶えざる強化に貢献していかねばならないと考えている。特に、大学の独立法人への移行に伴い、大阪大学の研究成果を社会に発信することがますます重要となることから、当協会の機関誌『生産と技術』、並びに大阪大学を中心として企画されている『ハイテク推進セミナー』等を活用して情報提供の充実を図りたい。

当協会の特色は、大阪大学の工学、理学、薬学に関する研究科、及び諸研究所と連携して活動していることである。これからの科学技術の発展に異分野の交流が不可欠であるといわれているが、この点でも協会ならではの役割を果たしていかねばならない。そのためには、協会自身が学際的視点をしっかりと持つことが重要であると考えている。これから当分の間、大学の変革の渦中にあることを余儀なくされる若手研究者が、21世紀の大学に期待されている「世界最高水準の研究」と「新しい学問の創造」の担い手として育っていくために、当協会にどのようなことができるのかを真剣に考えていきたい。

以上のような諸課題に対して、総力をあげて取り組む所存でありますので、多方面からのご支援とご協力とをお寄せくださいますようお願い致します。



* Kotohiko SEKOGUCHI
1933年6月生
1961年大阪大学大学院・工学研究科・
機械工学専攻博士課程修了
現在、(社)生産技術振興協会 理事長、
株式会社フジキン、技術顧問、工学博士、
機械工学・熱流動工学
TEL 06-6612-8531
FAX 06-6612-8541
E-Mail k-sekoguchi@fujikin.co.jp